

尚綱短大 村田陽子 遠藤時子 東北生活文化大 ○松田知子

目的 古代から我々祖先の衣生活を支えた最も重要な植物に麻類がある。その麻は糸となり布となって家族の衣服となる他に調布として貢納され、古代国家経済を支えてきた。麻の用途は幅広く、網索、網、袋、畳糸、小は鼻緒に至まで、麻なくして生活は存立しなかった。しかし繊維工業の発達に伴い、天然繊維の改良、化学繊維の開発・改質などにより我々は実に豊かな衣生活を享受しており、また大麻の麻薬対策による栽培禁止などから衣料原料としての麻類、特に大麻の復活はあり得ないことと思われる。この麻類の終焉にあたり、その利用の全貌を明らかにし、記録に止めることを目的として前回に続き宮城県について報告する。

方法 宮城県内の市町村史・誌等より麻類および衣料原料に関する記述を収集、整理し特色のある地域については現地調査を行う。

結果 宮城県の麻について収集した資料の中から、特色ある地区を選定し現地調査を行なった。県北部の栗原郡若柳町は蚊帳の名産地ではあったが、麻の多産地とはつながらなかった。この地は沼沢地という土質の関係で、麻の栽培には適さずほとんど他の地区から買い集めた麻茎を用いていた。また、若柳町は石巻と往復する川船交通の拠点となった商業の町なので、原料も集まるし、蚊帳会社もあり、衣料よりも蚊帳生産の方が高収入であったものであろう。隣接する南方町は、昭和10年頃まで水路周辺の農家は麻を栽培しており豪農は多産したので人手を頼む程であった。また、苧績み専門の女性があり、頼まれれば一軒の家に7~10人位集まった。用途は作業着、蚊帳であった。